

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年より神奈川県産科婦人科医会との協力事業として、県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について鏡検・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対して、神奈川方式は産科婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものである。

17年度は、頸部検診において、検査数（前年比＋826）、受診者数（＋969）とも増加している。

厚生労働省の指針により、17年度より子宮がん検診の対象者は20歳以上の隔年になった（従来30歳以上全年齢）。すべての行政で即実施ではないが、車検診も含めて今後の受診者数の動向に注目していく必要がある。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産科婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

神奈川方式子宮がん検診は日母（現日産婦医会）設立20周年記念事業としてスタートした。従って実施方法については昭和53年に日母がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化（日母方式）への答申を踏襲しつつ、平成17年改正のがん検診実施のための指針に従っている。従って対象者は30歳から20歳以上の女性と引き下げられ、通常の婦人科的診察を行うこと、コルポスコプを初回から細胞診と併用して使用することが奨められている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、問診の結果最近6ヶ月以内に不正性器出血、月経異常、褐色帯下のいずれかの症状を有していた者を中心に内膜細胞診を行っている。

子宮頸がん検診

平成17年度の子宮頸がん検診受診者は28,527名（前年度27,558名）で平成15年度26,504名を谷とし

て増加傾向にある。

がん確定者は54名（発見率0.19%）、内訳は頸がん46名、体がん4名、その他のがん4名であった。その他のがん4名の内訳は頸がん再発1、直腸がん1、卵巣がんⅢb期2であった。

年齢階級別がん確定数では、29歳以下6名、30歳代16名、40歳代12名、50歳代5名、60歳代8名、70歳以上6名であった。内訳では高年齢層に進行期頸がん、体がん、その他のがんの発見数が多かった。

30歳代以下の若年層と40歳代以上の年齢層の比較では、30歳代以下の受診者数11,834名（総数の41.5%）、がん確定数22名（発見率0.19%）に対して、40歳代以上の受診者数16,693名（総数の58.5%）、がん確定数31名（発見率0.19%）であり、ここでも若年層に対する検診の重要性が示唆された。

病期別的には30歳代以下で発見された頸がん23名中、0期13名、Ⅰa期2名、Ⅰb期以上4名、腺がん3名で早期がん中心の傾向が弱まったのに対し、40歳代以上では31名中、0期6名、Ⅰa期4名、Ⅰb期以上11名、腺がん3名で高年代層に進行がんの多い傾向は変わらなかった。

頸部腺がんは増加傾向が指摘されているが今年も6名のみであった。

異形成については確定者数164名（発見率0.57%）、内訳は軽度異形成91名、中等度52名、高度19名、腺異形成2名。年齢階層別ではやはり30歳代以下が110名（発見率0.93%）で、40歳以上54名（発見率0.32%）であって全年齢発見率は昨年度と変わりはないが30歳代以下の発見率は高くなった。

子宮体がん検診

平成17年度の体がん検診受診者は7,626名（前年度7,864名、頸がん検診受診者の26.8%（前年度28.5%））であった。

がん確定者は25名（発見率0.33%）。内訳は子宮体がん23名、体がん以外の悪性腫瘍として卵巣がん1、膵臓がん1が発見された。その他内膜増殖症17名が発見された。発見された体がんの内0期とⅠ期が15名で早期がん65.2%であった。頸がんとは異なり30歳代以下の発見はなかった。

関係の集計表は88頁に掲載